

# 京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5759 参照



※ P5771 参照



※ P5769 参照

2023.1

No. 766

## 目次

### [巻頭言]

新しい年を迎えて ..... 5757  
総長 湊 長博

### [大学の動き]

- 京都大学創立125周年 秋の記念行事を開催 ..... 5759
- 京都大学創立125周年記念 第16回京都大学東京フォーラムを開催 ..... 5761
- 京都大学春秋講義(令和4年度秋季講義)を開催 ..... 5762
- 令和4年度定年退職予定教員 ..... 5763

### [部局の動き]

- 宇治キャンパス公開2022を3年ぶりに現地開催 ..... 5769
- 京都大学創立125周年記念 京都大学宇治おうばくプラザ 第11回たそがれコンサートを開催 ..... 5770
- JCRファーマ株式会社から「本庶佑有志基金」および「がん免疫治療研究基金」への第三者割当による自己株式処分での寄附 ..... 5771
- エネルギー理工学研究所附属カーボンネガティブ・エネルギー研究センター開所記念行事を開催 ..... 5772

- 「京大 森里海ラボ by ONLINE 2022」を開催 ..... 5773
- フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所100周年記念式典・講演会を開催 ..... 5774

### [寸言]

ビジネスと研究, 生きるための哲学とは? 浅見 徹 ..... 5776

### [随想]

「解散は総理の専権事項」?  
名誉教授 初宿 正典 ..... 5778

### [洛書]

タイで研究室を主宰する経験 堀毛 悟史 ..... 5779

### [話題]

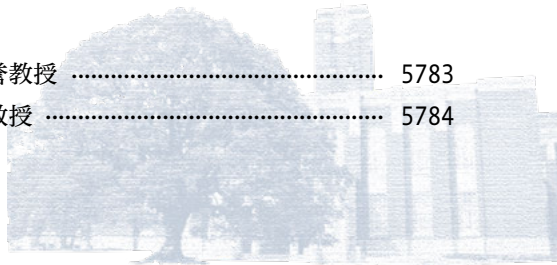
- 部局等ウェブサイト開発講習会を開催 ..... 5781
- 宇治キャンパスで2022年度安全衛生講習会を開催 ..... 5781

### [訃報]

増田 弘昭 名誉教授 ..... 5783  
高浪 満 名誉教授 ..... 5784



京都大学



## 巻頭言

## 新しい年を迎えて

総長 湊 長博



新年あけましておめでとうございます。

今年は卯年です。卯年の守り本尊は文殊菩薩ということで、全教職員と文殊の知恵を出し合って、今年1年を乗り切っていきたいと思います。

昨年も大変な1年でした。まずは、2月後半に始まった、ロシアによるウクライナ侵攻です。単に声明文を出すだけでは済まない、大学としてやらなければならないことをやるべきだと考え、大学間学術交流協定の締結校であるウクライナの2つの国立大学から、できうる限りの学生を受け入れるような体制を構築するよう検討を進めました。少し時間がかかりましたが、ようやく体制が整い、昨年10月の新学期までに、とりあえず14名の学生を受け入れることができました。もちろん彼らには、日本で生活するためにさまざまな支援が必要になりますので、並行してウクライナ危機支援基金を立ち上げました。この基金には、多くの民間の有志の方々、卒業生の方々のご理解をいただき、想定をはるかに超える額が集まりました。当初来日することになっていたものの、秋以降の状況悪化のため出国することができないでいる学生がまだ何人もいますが、できることなら彼らも全て受け入れて、安心して勉強できるようにしてあげたいと思っています。

次に、やはり新型コロナウイルス感染症です。昨年もかなりの感染拡大がありましたが、そのような状況下で、我々はいろいろなことを勉強したと思います。それは、相手の動きが全くわからない状況で、一体どのように対処すればよいかということです。さまざまな方がさまざまな発言をされましたが、冷静に考えますと、こういうときはドグマで対応するのはかなり難しいと思います。打てる手をきちんと打ちながら、冷静に状況を見て、フレキシブルに対応していくしかない、ドグマだけで動いては過ちを犯すことがありうることを学んだと思います。もちろん、まだ感染症自体は駆逐されたわけではありませんが、1年前に比べれば状況はかなり改善しており、さまざまな方面から打つべき手を打ってきたことが、確実に成果として表れているのだらうと思います。まだ気は抜けませんが、引き続き、フレキシブルな対応をしていきたいと思っています。また、この件については、本学では特に医学部附属病院の方々に力を尽くしていただきました。非常に感謝しております。

学内においては、昨年は創立125周年記念として、1年間にわたってさまざまな事業を実施しました。多くの市民の皆さんにもご参加いただき、おかげさまで大変成功裏に終わりました。基金も、経済状態が芳しくない中、目標額を達成いたしました。あらためて感謝いたします。

さて、昨年末に国際卓越研究大学の公募が開始され、我々としても今年はこれに果敢に挑戦していく年になります。振り返れば、1990年代半ば以降、日本は、「失われた30年」といわれるような長い停滞期に入りました。しばしば揶揄的に、思考停止などとも言われてきましたが、この間、確かに大学を含めて、抜本的な改革はほとんどなされてこなかったのではないのでしょうか。学内でも、さまざまな改革の議論は行われてきましたが、常に財政面での「ガラスの天井」があり、何かをすれば何かを引っ込めなければならないというゼロサム改革にならざるを得ませ

## 巻頭言

んでした。これでは大学の成長はほとんど望めず、我々は四苦八苦してまいりました。6年ごとの中期目標・中期計画を策定し、大きな改革をする余地のないところで、何とか少しでも大学を良く、そして強くしようと頑張るしかなかったわけです。そういう意味で、今回の政府の構想は、「25年後の大学の姿を示し、大学が自立して研究を続けていくための改革を自らの力で進めるにあたって長期助成金を抛出する」という、かつてない大胆な政策であると思います。

これは、おそらく大学が本当の意味で自立的成長を遂げるための体制を作ることができる最後のチャンスであると捉え、この資金を得て、25年後のゴールに向け、自らの力で成長していくことのできる大学の形を作っていこうと、昨年来学内で議論を重ねてきたところです。

その中でも重要なのは、大学運営における教員と職員との連携の問題です。しばしば研究者は、事務的な業務が多くて研究の時間が足りない、他方、事務職員はすでに業務が手一杯でこれ以上はできない、そういう状況でお互い競り合ってきました。それも無理もない話で、これだけ仕事ややるべきことが増えて、しかしそれを実行する人員が全く増えずむしろ減らさざるを得ない、まさに財務の「ガラスの天井」があったわけです。これでは、本当の意味での成長はあり得ない。

まず必要なことは、きちんと大学運営に関わることでできる職員の数を増やすことです。そうしないと、職員がますます専門化していく仕事に対応していくことが物理的に不可能になります。まず人を増やし、一人一人、自分がどういう局面で大学の成長に関与できるかということを明確に意識しながら、実際にやりたいことができるという形を作らなければなりません。そのうえで、どのように事務改革を進めていくか、どのような方法が効率的かという話をしていかなければなりません。

これまでのゼロサム改革を超えられる体制を担保したうえで、教員の役割と職員の役割を明らかにし、両者が緊密に連携することにより、初めて大学がどのように成長できるかということが議論できる状況になると思います。

我々は今、ここ2、3年の話をしているわけではありません。25年後の話をしています。25年後の新しい大学の形を目指して今から何をしていかなければならないかという議論を進めてきたわけです。そして、議論の成果をきちんとまとめて、我々が本当の意味で、自由で自立した成長を遂げることができるような大学運営を行うための改革の下準備をこれから始めていく、まさにそのスタートラインが本年であります。自立した大学として、世界の有力研究大学に伍して国際社会の中で承認を得ていくための改革のスタートであり、そのビジョンを我々は真摯に議論していきたいと思えます。

本年もよろしく申し上げます。

(令和5年1月5日(木)、事務職員を対象として開催した『総長年頭挨拶』より)

[目次に戻る](#)

大学の  
動き

## 京都大学創立 125 周年 秋の記念行事を開催

2022年に創立125年の節目を迎えたことを記念して、2022年11月5日(土)に百周年時計台記念館において秋の記念行事を開催しました。これは、創立記念日の同年6月18日、および19日に実施した記念式典等の記念行事に続くもので、今回は京都大学ホームカミングデイと併催することにしたものです。

午前中に実施した、本学卒業生のプロミュージシャン山中一毅氏率いる Kazuki Yamanaka Special Quartet による京都大学ホームカミングデイジャズコンサートに続き、午後に特別シンポジウムを開催し、一般市民など約500名の参加者が集いました。シンポジウムは、稲垣恭子 理事・副学長の司会により進められ、はじめに、湊 長博 総長が開会の挨拶を述べ、今回はホームカミングデイに合わせて創立125周年記念秋の特別シンポジウムなどのイベントを開催するもので、皆様にご満足いただければとのメッセージを伝えました。

次に、本学卒業生で小説家の平野啓一郎氏、京都大学CFプロジェクト(Create the Future Project)等に多大な支援をいただいている建築家の安藤忠雄氏による講演を行いました。平野氏は「人間と環境」と題して、自身が提唱する「分人」という概念を用い、環境問題や若年層の自殺問題などの社会のテーマを人と外的環境との関わりから語られました。また、安藤氏は「地球は一つ」と題して、自身の人生を振り返って、若い頃の世界旅行や直島(香川県)の設計などのエピソードを時折笑い話を交えつつ、想像力や好奇心の大切さを熱く語られました。

講演に引き続き、佐藤卓己 理事補がモデレーターを務め、平野氏、安藤氏に、本学卒業生で俳優の辰巳琢郎氏、湊総長を加えた4名で、「社会が求める人材像について～本学卒



Kazuki Yamanaka Special Quartetによるジャズコンサート



特別シンポジウムで挨拶する湊総長



平野氏



安藤氏



パネルディスカッション

大学の  
動き

業生としての期待，本学支援者としての期待～」をテーマとしたパネルディスカッションを行いました。最後に，串田俊巳 理事より挨拶があり，盛況のうちに閉会となりました。

その後，創立125周年記念行事の一環として，本学への寄附者に感謝を表す場として，「感謝の集い」を開催しました。辰巳琢郎氏による講演の後，特別シンポジウムの登壇者3名と総長，役員を交えて懇談会を行い，終始和やかな会となりました。

また，創立125周年を記念して，キャンパスにおいて総合博物館記念展示「創造と越境の125年」，大学文書館記念展示「京大の周年記念行事-史料でたどるお祝いの歴史-」が開催されており，記念行事に参加した一般市民や卒業生など多くの方が来場されました。

夜には，プロジェクションマッピングを百周年時計台記念館東側の総合研究13号館にて実施しました。吉田キャンパスが位置する京都の東の守り神である「青龍」をストーリーテラーに，京都大学の歴史を振り返りながら，125周年を一つの通過点としたこれから先の京都大学の輝きを描いたストーリーが，「青龍」が進化しながら未来へ進んでいく様子とともに鮮やかに投影されました。このプロジェクションマッピングは多くの観衆の目をくぎ付けにし，創立125周年記念行事の有終の美を飾りました。

プロジェクションマッピングの様子は，以下のサイトからご覧いただけます。

京都大学創立125周年記念行事 創立125周年記念プロジェクションマッピング (2022年11月5日) (YouTube)

<https://www.youtube.com/watch?v=upeCaQ9KGSc>



辰巳氏



プロジェクションマッピング

目次に戻る ↗

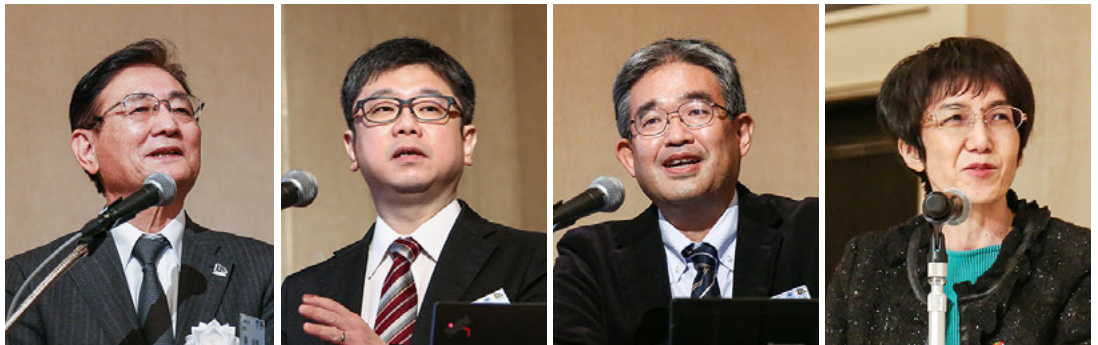
大学の  
動き

## 京都大学創立125周年記念 第16回京都大学東京フォーラムを開催

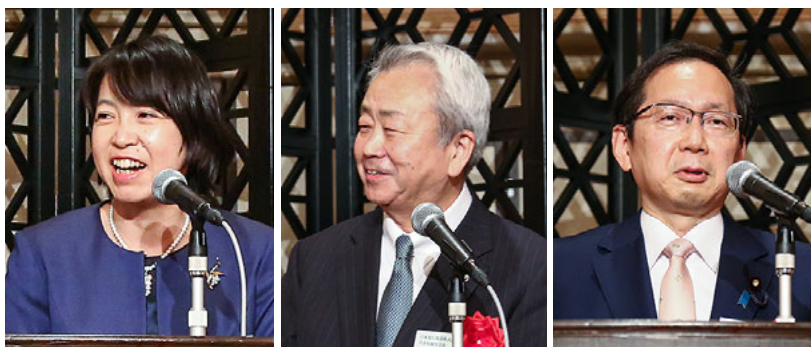
「未来をつくる今日(京)の研究」をテーマに、京都大学創立125周年記念 第16回京都大学東京フォーラムをシェラトン都ホテル東京にて2022年12月2日(金)に開催しました。出席者は延べ約180名で、本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等が集まり、学内からは湊 長博 総長をはじめ、理事・副学長、部局長等が出席しました。

フォーラムでは、湊総長による挨拶の後、創立125周年記念事業の一つとして掲げる「研究力強化」の一環としてスタートした学内ファンド「くすのき・125」に採択された2名の教授が講演を行いました。はじめに、寺村謙太郎 工学研究科教授が「[「たいよう」と「みず」]の力によって実現するカーボンニュートラル」と題して、続いて、大山修一 アジア・アフリカ地域研究研究科教授が「都市のごみとシロアリの力で実現するサヘル地域の砂漠緑化」と題して講演を行い、激甚化する環境問題に関する最新の研究に、参加者から高い関心が寄せられました。

その後、澤田拓子 理事(産官学連携担当)をモデレーターとして、寺村教授、大山教授の



左から、湊総長、寺村教授、大山教授、澤田理事



左から、里見審議官、澤田会長、竹内議員



パネルディスカッションの様子



懇親会の様子

大学の  
動き

3名によるパネルディスカッションを行いました。京都大学の研究について、文系、理系、両方の分野の教授から意見を伺い、最後には、今後ますます産官学連携を強化していきたいと締めくくられました。

パネルディスカッション終了後に実施した懇親会では、湊総長による開会挨拶の後、来賓の里見朋香 文部科学省大臣官房審議官（総合教育政策局担当）、澤田 純 日本電信電話株式会社代表取締役会長（京都大学鼎会会長）、竹内 譲 衆議院議員からそれぞれ挨拶がありました。懇親会は3年ぶりの開催となり、参加者は交流を楽しみました。

また、今回の開催に先行して、経済界のトップで活躍する本学卒業生による総長支援団体「京都大学鼎会」の第11回総会が会場とオンラインを合わせて約60名の出席者を得て同日に開催され、今後の本学の発展に向けての意見交換などが行われました。

本フォーラムは、首都圏における本学の情報発信という目的にとどまらず、各界で活躍されている本学関係者の結束を図る場として実施しています。今後もこのような機会を継続的に提供し、本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えています。

（総務部（渉外課））

[目次に戻る](#)

## 京都大学春秋講義（令和4年度秋季講義）を開催

京都大学春秋講義は、京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、1988（昭和63）年秋から開講している公開講座です。

今回はメインテーマを「分断の時代－哲学者からのヒント」として、12月9日（金）、14日（水）に、全2回の講義を開講しました。

第1回は上原麻有子 文学研究科教

授による「他者を知ること」、第2回は児玉 聡 文学研究科教教授による「災害の倫理」と題した講義が行われ、2日間で計244名の入場者がありました。



会場の様子



講義する上原教授



講義する児玉教授

大学の  
動き

参加者からは、「丁寧な説明，鋭い分析に感動しました。分断の時代を切り開くヒントを与えていただきました」，「初めて参加しましたが，興味深く拝聴しました。これからの自分の生き方，社会との関わり方をもっと深く考えたいと思いました」，「直近の世の中を整理して説明いただき，解像度高く理解できた感じがしています」，「哲学という難しい分野にもかかわらず，講義が分かりやすくとても面白かったです」など多数の感想が寄せられました。

本講義内容は京都大学「YouTubeチャンネル」にて配信中です。申込不要でどなたでもご覧いただけます。

【関連リンク】

Kyoto University-YouTube (<https://www.youtube.com/c/KyotoUniversityOfficial>)

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

## 令和4年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により，教員84名(教授73名，准教授8名，講師2名，助教1名)が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	増 田 眞	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	18世紀フランス文学，特にルソーに関する研究
	中 畑 正 志	思想文化学専攻 思想文化学講座	プラトンとアリストテレスを中心とする西洋古代哲学の研究 哲学の基礎概念の形成と受容に関する研究
	落 合 恵美子	行動文化学専攻 行動文化学講座	家族とジェンダーの比較歴史社会学的研究
	水 野 一 晴	行動文化学専攻 行動文化学講座	アフリカ，アンデス，ヒマラヤの高山帯・乾燥地の自然環境と地域社会に関する研究
教育学研究科	杉 本 均	教育学環専攻 教育社会学講座	比較教育学 マレーシア，シンガポール，ブータン王国等の教育，トランスナショナル高等教育の研究
法学研究科	岡 村 忠 生	法政理論専攻 公法講座	個人所得課税，消費課税，法人課税，国際課税に関する租税法の研究
	村 中 孝 史	法政理論専攻 社会法講座	労働法に関する研究
	小久保 孝 雄	附属法政策共同研究センター 政策実務教育支援セッション	民事紛争解決制度，特に民事訴訟における実務上の諸問題に関する研究 法曹実務教育に関する研究
理学研究科	雪 江 明 彦	数学・数理解析専攻 多様体論講座	概均質ベクトル空間の有理軌道，ゼータ関数，密度定理の研究
	塩 田 隆比呂	数学・数理解析専攻 解析学講座	古典可積分系に関する研究
	武 末 真 二	物理学・宇宙物理学専攻 相関重力基礎論講座	セルオートマトンを含む離散格子系の動力学と非平衡統計力学に関する研究



大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
理学研究科	川上 則雄	物理学・宇宙物理学専攻 物性基礎論講座	凝縮系物理の理論的研究
	嶺 重 慎	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙物理学講座	宇宙物理学, 特にブラックホール 天体の活動性に関する研究
	吉村 一良	化学専攻 無機化学講座	強い電子相関を有する遍歴電子化 合物に関する研究
	曾田 貞滋	生物科学専攻 自然史学講座	昆虫類の種の多様化と群集形成過 程に関する進化生態学的研究
	土井 知子	生物科学専攻 情報分子細胞学講座	細胞膜を介したチャネルや受容体 のシグナル伝達調節機構に関する 研究
	一本 潔	附属天文台	太陽電磁流体现象に関する分光学 的研究
医学研究科	玉木 敬二	医学専攻 法医学講座	DNA多型に関する研究とその法 医学的应用, 法医病理学
	戸井 雅和	医学専攻 外科学講座	乳腺疾患, 特に乳癌を主たる課題 とした診断と治療および予防に 関する研究
	別所 和久	医学専攻 感覚運動系外科学講座	骨形成因子の基礎的研究 硬組織再生医療・生体材料の基礎 臨床的研究 顎骨骨髓炎・口腔健康管理の臨床 研究
	小杉 眞司	社会健康医学系専攻 健康管理学講座	ゲノム医療と遺伝カウンセリング に関する研究 網羅的遺伝学的検査に関する研究 研究倫理審査に関する研究
	田村 恵子	人間健康科学系専攻 先端中核看護科学講座	がん患者のスピリチュアルケアに 関する研究 緩和ケアに従事する看護師教育の 研究 哲学対話に関する研究
	前田 祐子	人間健康科学系専攻 先端理学療法学講座	終末期医療における患者-医療者 間の情報提供と行動変容のあり方
	十一元 三	人間健康科学系専攻 先端作業療法学講座	自閉スペクトラム症に関する研究 心理的ストレスの測定に関する精 神生理学的研究 人間の記憶に関する研究
	YOUSSEFIAN, Shohabeddin	附属医学教育・国際化推 進センター	血管疾患の分子細胞メカニズムお よび疼痛感受性の遺伝要因・生理 メカニズムの解明
医学部附属病院	宮本 享		脳血管障害の病態と外科治療に 関する研究
薬学研究科	高倉 喜信	薬学専攻 病態機能解析学講座	ドラッグデリバリーシステムに 関する研究
	金子 周司	薬学専攻 病態機能解析学講座	臨床エビデンスに基づく創薬研究
工学研究科	塚田 和彦	社会基盤工学専攻 資源工学講座	地下空間の保全のための計測評価 技術に関する研究 構造物の健全性診断と非破壊検査 技術に関する研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	三ヶ田 均	社会基盤工学専攻 資源工学講座	応用地球物理学研究 地下を伝播する波動に関する理論 と実践, および計測機器の開発研 究
	清野 純史	都市社会工学専攻 地震ライフライン工学講 座	地震工学, 特に地盤震動およびラ イフラインの地震時挙動に関する 研究
	三村 衛	都市社会工学専攻 ジオマネジメント工学講 座	軟弱地盤の変形に関する研究 地盤遺跡の保全に関する研究 原位置試験装置の開発と実地盤適 用に関する研究
	高野 靖	建築学専攻 環境構成学講座	高速移動音源の放射音特性と評価 手法の研究 遺伝的アルゴリズムによる音響伝 搬系最適化の研究
	竹脇 出	建築学専攻 環境構成学講座	建築構造物の最悪シナリオを考慮 した耐震・免震・制振設計および 建築構造力学・応用力学に関する 研究
	榎木 哲夫	機械理工学専攻 機械システム創成学講座	人間機械系における人間知と機械 知の融合のためのシステムデザ インに関する研究
	中部 主敬	機械理工学専攻 機械材料力学講座	熱・物質移動現象の究明およびそ の制御技術に関する研究
	松野 文俊	機械理工学専攻 機械力学講座	ロボティクス, メカトロニクス, 制御工学, レスキュー学に関する 研究
	神野 郁夫	原子核工学専攻 量子物質工学講座	放射線物理および放射線検出法に 関する研究
	河合 潤	材料工学専攻 材料プロセス工学講座	材料分析方法の研究開発, 特に電 子分光やX線を用いた化学状態, 表面, 微量分析法の開発
	和田 修己	電気工学専攻 電磁工学講座	集積回路と電気電磁回路モデリン グ, 電気電子システムの電磁両立 性 (EMC), EMC 実装工学に関す る研究
	大塚 浩二	材料化学専攻 有機材料化学講座	ミクロスケール液相分離分析法の 高性能化・高機能化とその応用 に関する研究
	秋吉 一成	高分子化学専攻 高分子合成講座	バイオインスパイアード自己組織 材料の創製と医療応用に関する研 究
清水 芳久	附属流域圏総合環境質研 究センター	微量有機汚染物質の環境中挙動や 生物影響を検出・制御する方法の 開発 統合的流域管理システムの構築	
農 学 研 究 科	土井 元章	農学専攻 園芸科学講座	蔬菜・花卉の環境応答に基づく開 発・生産・利用技術の開発に関す る基礎的研究
	藤井 義久	森林科学専攻 生物材料工学講座	木材の加工と利用技術の研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農学研究科	宮 川 恒	応用生命科学専攻 応用生化学講座	含窒素植物二次代謝成分の生物有機化学的研究ならびに農業に関する啓発・リスクコミュニケーション
	南 直治郎	応用生物科学専攻 動物遺伝増殖学講座	哺乳動物初期胚の遺伝子発現に関する研究
人間・環境学 研 究 科	藤 田 耕 司	共生人間学専攻 言語科学講座	ヒトの言語能力, 特に回帰的演算機構の生物学的基盤およびその起源・進化を巡る進化・生物言語学の研究
	小 方 登	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	衛星画像や数値標高モデルの分析を通じた考古・歴史地理学的研究 現代都市空間の時間地理学的研究
	阪 上 雅 昭	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	宇宙での非線形非平衡現象の研究 重力と一般相対性理論 物理学の視座による生物の集団行動や人の発達の研究
	酒 井 敏	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	大気や海洋の流体としての性質およびそれらが環境に及ぼす影響の研究
	加 藤 眞	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	植物と昆虫の送粉共生に関する研究 森林生態系・海洋生態系における生物の進化と生態に関する研究
エネルギー科学 研 究 科	石 原 慶 一	エネルギー社会・環境科学専攻 社会エネルギー科学講座	非平衡材料の創製と応用に関する研究 エネルギーシステムのシナリオ分析に関する研究
	白 井 康 之	エネルギー応用科学専攻 エネルギー材料学講座	超電導応用エネルギー機器, 次世代エネルギーシステムに関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	玉 田 芳 史	東南アジア地域研究専攻 地域変動論講座	タイ地域研究, 比較政治学, 具体的にはタイの現代政治ならびに政治史に関する研究
情報学研究科	吉 川 正 俊	社会情報学専攻 社会情報モデル講座	データベースに関する研究
	太 田 快 人	数理工学専攻 システム数理講座	制御システムのモデリングおよび制御則設計に関する理論ならびにそれらの応用に関する研究
生命科学研究科	石 川 冬 木	統合生命科学専攻 遺伝機構学講座	染色体, 特に末端部テロメアの機能構造研究
	福 澤 秀 哉	統合生命科学専攻 応用生物機構学講座	光合成の CO <sub>2</sub> 濃縮による維持と環境応答の分子機構, ならびに微細藻の生存戦略に関する研究
	高 田 穰	高次生命科学専攻 ゲノム生物学講座 附属放射線生物研究センター 晩発効果研究部門	DNA 損傷への応答メカニズムの研究 DNA 損傷応答の欠損病の研究 内因性 DNA 損傷の研究
総合生存学館	積 山 薫	総合生存学専攻	認知システムの発達と可塑性に関する研究 高齢者のライフスタイルと認知機能に関する研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
化学研究所	倉田博基	附属先端ビームナノ科学センター	分析電子顕微鏡による局所構造および電子状態の解析と可視化に関する研究
人文科学研究所	岡村秀典	文化表象研究部門	中国考古学研究
	竹沢泰子	文化連関研究部門	人間集団の分類に関する研究 人種・エスニシティに関する文化人類学的研究
医生物学研究所	杉田昌彦	ウイルス感染研究部門	脂質を標的にした新しい免疫システムの先駆的基盤研究
	土方誠	ウイルス感染研究部門	B型肝炎ウイルスおよびC型肝炎ウイルスに関する研究
	細川暢子	再生組織構築研究部門	哺乳類細胞におけるタンパク質品質管理機構の研究
	平芳一法	再生組織構築研究部門	転写調節機構特に基本転写機構の解析 RNA aptamer の応用に関する研究
生存圏研究所	梅澤俊明	生存圏診断統御研究系	木質の生分解, 生合成, および植物二次代謝に関する研究
	大村善治	生存圏開発創成研究系	宇宙プラズマ中の電磁波放射および粒子加速散乱機構に関する研究
防災研究所	堀口光章	気象・水象災害研究部門	大気境界層における乱流と気象現象に関する研究
	平石哲也	附属流域災害研究センター	沿岸域の高波・高潮・津波防災と海岸浸食対策や土砂環境の保全に関する研究
	飯尾能久	附属地震災害研究センター	内陸地震の発生過程と発生予測に関する研究
	藤田正治	附属流域災害研究センター	流域の土砂動態のモデルを基礎とした土砂災害シミュレーターの開発および土砂管理の課題への応用に関する研究
	竹門康弘	附属水資源環境研究センター	河川・湖沼・湿地の水生昆虫や魚介類の生息場を形成・維持するための応用生態工学的研究
基礎物理学研究所	村瀬雅俊	物質構造研究部門	生命現象に関する基礎物理学的研究
複合原子力科学研究所	中島健	原子力基礎工学研究部門	原子炉物理, 臨界安全, 核データ評価に関する研究および関連する人材育成, 研究炉の安全評価および安全管理
	五十嵐康人	原子力基礎工学研究部門	環境放射能, 放射性物質の環境動態, 大気エアロゾル, 地球化学, 放射化学に関する研究
	木梨友子	原子力基礎工学研究部門	ホウ素中性子捕捉療法の治療効果向上に関する放射線影響研究
東南アジア地域研究研究所	原正一郎	環境共生研究部門	情報学の地域研究への展開と応用に関する研究
野生動物研究センター	古市剛史	陸圏保全研究部門	霊長類の集団間移籍個体の生活史と初期人類の進化過程に関する研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
野生動物研究センター	伊 谷 原 一	陸園保全研究部門	アフリカ大型類人猿（ボノボとチンパンジー）やアフリカ野生動物の社会生態学的研究
ヒト行動進化研究センター	古 賀 章 彦		ゲノム構成の変遷への転移性遺伝因子および縦列反復配列の影響
人と社会の未来研究院	河 合 俊 雄		心理療法および現代のこころに関する臨床心理学的および学際的研究

(人事部(人事・労務課))

[目次に戻る ↗](#)



## 宇治キャンパス公開 2022 を3年ぶりに現地開催

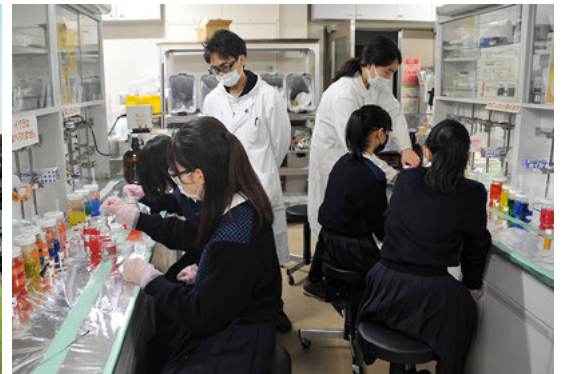
宇治キャンパス公開を、2022年10月22日(土)、23日(日)の2日間にわたり実施しました。昨年、一昨年とコロナ禍のためオンライン開催でしたが、3年ぶりの現地開催となりました。26回目を迎えた今回は、「キミのワクワクがここにある みんなで過ごす科学的な週末」をテーマとして、子どもから大人まで市民が科学に直接触れてその素晴らしさを感じられるよう、趣向を凝らした多くの公開ラボや講演会を開催し、2日間で延べ1,699名が参加しました。

うち10月22日には、宇治おうばくプラザきはだホールにて京都大学創立125周年記念特別講演会を開催しました。湊 長博 総長による「人生百年時代を生きる若者達へ」と題した講演では、「若い人たちには本当の自分を見つけるまで、失敗を恐れず何度でもチャレンジしてほしい」とメッセージを送りました。講演後、湊総長は各研究所の公開ラボを見学し、訪れた市民や公開ラボの教職員、学生と触れあったほか、宇治川オープンラボラトリー会場も訪れました。

また、キャンパス公開の行事とは別に、湊総長と宇治キャンパスで活動する4研究所の若手



来場者を迎えるエアアーチ



巨大分子(ポリマー)の実験



光合成色素を取り出す実験



樹木観察会



特別講演会で講演する  
湊総長



公開ラボを見学する湊総長



流水階段歩行を体験する湊総長

部局の  
動き

研究者との座談会を開催しました。座談会には15名の若手研究者が参加し、中北英一 防災研究所長の司会により、それぞれの研究所を代表して研究内容を紹介するプレゼンテーションを行った後、湊総長からそれぞれに対するコメントがあり、他の若手研究者も一人ずつ総長との意見交換を行うなど、和やかな雰囲気で行われました。



湊総長と若手研究者との座談会

参加者からは、「めったに見ることのできない大型プラズマ実験装置を見ることができて興奮しました」、「とても親切に教えてくださり子どもが大喜びでした」、「マイクロ波を使った無線電力伝送の公開実験で教授の説明がわかりやすく、興味深く、あっという間の時間でした」等の感想がありました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

## 京都大学創立125周年記念 京都大学宇治おうばくプラザ 第11回たそがれコンサートを開催

宇治キャンパスの宇治おうばくプラザにおいて、「京都大学創立125周年記念 京都大学宇治おうばくプラザ 第11回たそがれコンサート」を2022年11月29日(火)に開催しました。本コンサートは、本学と地域の方々との交流を深めることを目的として、2010年度から行っているものです。

2020年度、2021年度はコロナ禍により中止していましたが、今年度は京都大学音楽研究会器楽部を迎え、京都大学創立125周年記念事業として3年ぶりに開催しました。

当日は約170名の来場者があり、はじめに青山卓史 化学研究所長の開催挨拶および連携協定を締結している宇治市の松村淳子 市長から来賓挨拶がありました。その後、京都大学音楽研究会器楽部によるピアノ独奏、連弾、他楽器との重奏などの演奏が行われました。



開催挨拶をする青山所長



来賓挨拶をする松村市長



閉会挨拶をする中北所長

部局の  
動き



京都大学音楽研究会器楽部による演奏



会場の様子

最後に、中北英一 防災研究所長より閉会挨拶があり、本コンサートは盛況のうちに幕を閉じました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

## JCRファーマ株式会社から「本庶佑有志基金」および「がん免疫治療研究基金」への第三者割当による自己株式処分での寄附

このたび、JCRファーマ株式会社と本学との間で、本学に設置した「本庶佑有志基金」および「がん免疫治療研究基金」に対する第三者割当による自己株式処分での寄附について合意し、本学が同社の株100万株を取得したことについて、2022年12月5日(月)に記者発表を行いました。

今回の寄附に際し、湊 長博 総長から芦田 信 JCRファーマ株式会社代表取締役会長兼社長に、本学の活動に対する深い理解と格段の支援に関してお礼を述べ、感謝状を贈呈しました。

本庶 佑 医学研究科附属がん免疫総合研究センター長・高等研究院特別教授からは、お礼とともに、今回の寄附が大学と企業との新しい協力体制の一つであること、また、本学が株式を保有し、その株式の配当金を受け取ることで継続的かつ安定的な資金を得ることができ、長



感謝状贈呈後の記念撮影(左から、芦田代表取締役会長兼社長、本庶特別教授、湊総長)



前列左から、本庶特別教授、芦田代表取締役会長兼社長、湊総長、後列左から、伊佐 正 医学研究科長、本多 裕 JCRファーマ株式会社上席執行役員管理本部長、時任宣博 研究担当理事・副学長





期にわたる若手研究者の育成やがん免疫研究の発展への支援が可能となることが述べられました。

記者発表の動画はこちらからご覧いただけます。

URL: <https://youtu.be/YT6wI7JsJ54>

(大学院医学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

## エネルギー理工学研究所附属カーボンネガティブ・エネルギー研究センター開所記念行事を開催

エネルギー理工学研究所では、附属カーボンネガティブ・エネルギー研究センター開所を記念して、記念式典、講演会および祝賀会を、宇治キャンパスおうばくプラザで2022年10月8日(土)に開催しました。

同センターは、エネルギー科学研究科、工学研究科と連携した異分野連携研究の推進により、2050年カーボンニュートラル社会を実現するための二酸化炭素を有効利用する新しい概念と学術基盤の形成、科学技術の創出、人材育成を目的として、2022年8月に設置されました。

記念式典では、森井 孝 エネルギー理工学研究所長の式辞、時任宣博 理事・副学長の挨拶に続いて、山本武史 文部科学省研究振興局大学研究基盤整備課課長補佐、榎木哲夫 工学研究科長、今谷勝次 エネルギー科学研究科副研究科長から祝辞が述べられ、同センターの研究・教育活動の発展と社会への貢献に期待が寄せられました。

講演会では、山地憲治 地球環境産業技術研究機構理事長による「カーボンニュートラル実現のシナリオ分析」、加藤之貴 東京工業大学科学技術創成研究院ゼロカーボンエネルギー研



森井所長



時任理事・副学長



榎木研究科長



今谷副研究科長



山地理事長



加藤所長



加藤所長による講演

部局の  
動き

究所長による「グリーン・トランスフォーメーションに向けての取組み」と題する講演があり、引き続き、同センターの教授3名が研究紹介を行いました。

記念祝賀会では、植田憲一 電気通信大学名誉教授、青山卓史 化学研究所長から祝辞が述べられた後、吉川 潔 名誉教授による乾杯の発声があり、和やかな雰囲気の中で、盛況のうちに終了しました。



式典記念写真

(エネルギー理工学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

## 「京大 森里海ラボ by ONLINE 2022」を開催

フィールド科学教育研究センターでは、高大連携事業に力を入れており、2019年度から毎年度、森里海ラボを実施しています。今年度は、公益財団法人イオン環境財団と共同主催、野生動物研究センターと共催で、2022年10月23日(日)に「京大 森里海ラボ by ONLINE 2022」を開催しました。今回のテーマは、今年度よりフィールド科学教育研究センターとイオン環境財団が取り組む新しい里山・里海の創成プロジェクトに関連した「里山・里海の魅力と課題」で、全国から連携高校12校の高校生約30名がオンラインで参加しました。

本イベントは、近年の生活スタイルや地球規模での環境の変化から、人々の暮らしが里山・里海から離れ、これまでの里山・里海の特徴が大きく棄損されているという認識から、各高校生の身の回りにある里山・里海の状況を共有し、これからの里山・里海や身の回りの自然のあり方を考えることを目的としています。

はじめに、朝倉 彰 フィールド科学教育研究センター長および山田 晃 公益財団法人イオン環境財団事務局員からの開会挨拶がありました。続いて、小山明子 国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・か



基調講演の画面

部局の  
動き

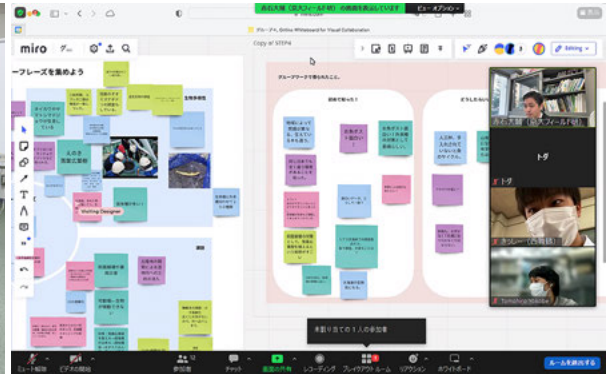
なざわオペレーティング・ユニット研究員より「能登の里山里海～今、そして未来へ～」と題した基調講演が行われ、世界農業遺産である能登の魅力や価値、次いで課題解決に向けた取り組みについて紹介されました。

引き続き行われたグループワークでは、6グループに分かれ、オンラインホワイトボードを活用して、身近な里山・里海の状況について意見交換を行いました。各地の里山・里海の現状が私たちの生活と深くかかわっていることを学び、解決の難しい課題があることを共有し、その後グループごとに検討内容を発表しました。

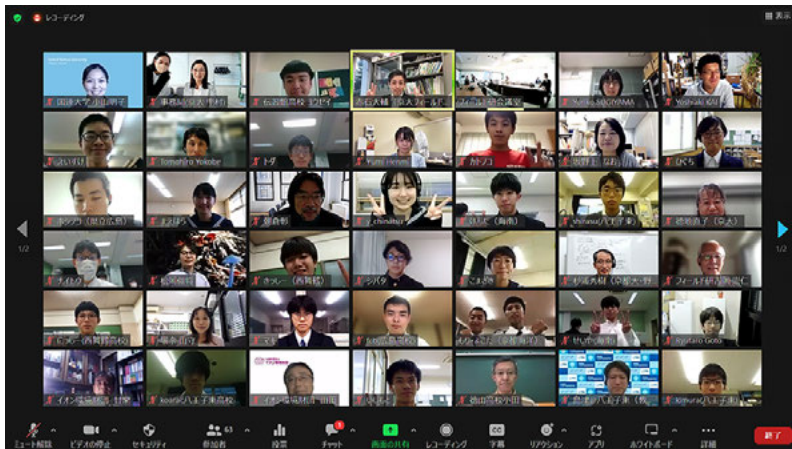
最後に、Zoom画面に映し出された高校生やスタッフとの記念写真撮影があり、本イベントは盛会のうちに終了しました。



グループワークの様子



グループワークの画面



集合写真

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る](#)

## フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所100周年記念式典・講演会を開催

フィールド科学教育研究センターは、2022年11月27日(日)に和歌山県白浜町のホテルシーモアにて、瀬戸臨海実験所100周年記念式典・講演会を対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。実験所の卒業生や共同研究者、自治体や漁業共同組合の方々、京都大学の教職員など95名の来場と、120名のオンライン参加がありました。

記念式典では、朝倉 彰 フィールド科学教育研究センター長および湊 長博 総長の式辞に続

部局の  
動き

き、塩田剛志 文部科学省高等教育局専門教育課長，白山義久 海洋研究開発機構科学アドバイザー・京都大学名誉教授，井澗 誠 白浜町長，遊佐陽一 奈良女子大学副学長から祝辞がありました。

次いで，地域の発展振興に尽力されている瀬戸部および，日頃から海洋生物を提供いただいている漁業共同組合の方々へ感謝状と記念品を贈呈しました。

講演会では，瀬戸臨海実験所100年の歴史，海産無脊椎動物や畠島一世紀間調査の研究成果，教育関係共同利用拠点の活動紹介，白浜水族館の歴史をテーマとして，実験所の教職員による講演がありました。100年という長い歴史に思いをはせ，懐かしい写真や最新の研究成果を参加者で共有することができ，講演会は盛会のうちに終了しました。



司会進行する下村通誉  
瀬戸臨海実験所長



式辞を述べる  
朝倉センター長



式辞を述べる湊総長



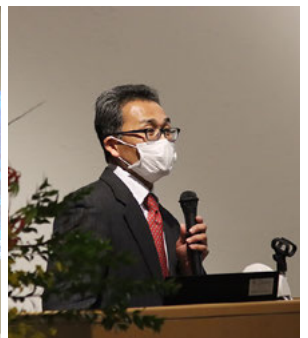
祝辞を述べる井澗町長



瀬戸部への感謝状贈呈



講演する中野智之 フィールド科学教育研究センター講師



講演する加藤哲哉 フィールド科学教育研究センター技術専門員



集合写真

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

## ビジネスと研究、 生きるための哲学とは？

浅見 徹



大阪万博の1970年に入学しましたが、当時の京大は自由放任で面倒見が悪いと噂されていました。果たせるかな、入ってみたら、入学式の途中で学生がなだれ込んでくるほど大学紛争の只中にあり、不安は的中しました。教養部時代、真面目に読んだのは、英語の勉強用に古本屋で買ったファインマン物理学Vol.2くらいでしょう。幸運なことに稀代の名著で、相対論的な電磁気学と最小作用の原理には、専門知識だけでなく、哲学も学びました。前者は十分勉強しない限り良いアイデア（特殊相対性理論）などは出て来ないこと、後者はニュートン力学との対比でアイデアや立身出世で自分より先の者があっても挽回のチャンスは十分にあることを教えてくれました。後年うつ病にならなかったのはこの本のおかげです。専門家からは笑われますが、このような哲学的な読み方を勝手にできるのが独学の強みでしょう。

KDD（現在のKDDI）の研究所に入社してからは失敗続きでした。1980年代に米国製コンピュータの新規導入を一人で任されたため、電話線でコンピュータを米国のベル研究所につなぎ、そこ経由でARPANETと電子メールを送受して、コンピュータの勉強をしていました。ところが、国内の大学や研究機関の人たちのメールも中継してしまうという、国内法にも国際法にも抵触する大失態を犯しました。会社の幹部に、「君は高価な国際電話を使って外国とジョークを飛ばしあっているのだそうだな。」と言われたときはさすがにへこみました。幸い、利用者だった大学や有名な研究者の支持、直属上司の差配、郵政省の友人等のサポートがあり、何とか首にならずにすみしました。もう一つの大きな失敗は、1990年代で、長野県で高速ネットワークの構築実験（ADSLの実証実験）を賛同者たちといっしょにほとんど手弁当で実施したことです。実験後、伊那市有線放送農業協同組合に投資回収5年と回答しましたが、全国サービスにするには法改正して加入者線の解放をしない限りあり得ない状況でした。それにも関わらず、そのデータを基に実験参加者が東京メトリックを立ち上げたため、協業を目指しましたが、KDDIへの再編途上にあったKDDでは果たせませんでした。東京メトリックはソフトバンクに吸収され、今やKDDIの競争相手です。

二つの失敗に共通するのは法改正すれば大きなビジネス（インターネットとその高速化）が生まれる状況だったということです。私は、本業の研究（ネットワークの運用）とは少しずれた、これら半分片手間の仕事で法律違反すれすれの事件を2度も引き起こし、上記のような大きな商機を気かけもせず研究畑を歩んで、その時々興味あることをやってきました。その意味で、ビジネスマンとしては失格です。その後、東京大学で教鞭をとった後、株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）に移り、一番苦手と思っていた経営をすることになりました。

ATRは、情報通信関連分野における先駆的・独創的研究の推進を掲げて1986年に発足しました。Google Homeの祖型とも言える音声認識技術や、衛星間光通信といった実用化に30年以上かかった長期の基礎研究を株式会社形式で立ち上げた異色の研究所です。当時の先

## 寸言

達の野心には脱帽です。2000年ころに日本の科学技術研究が基礎研究から実用研究に舵を切り、事業環境が一変したため、現在は、テーマを縮小し、脳情報科学とロボット工学を軸に、競争的資金で種々の研究機関と共同で研究活動を進めております。

残念ながら、日本の科学技術基本計画は5年計画ですから、長期の研究ビジョンは、国家に期待することはできません。我々一人一人が、今から30年先の社会を見据え、それをベースに次の中長期の計画を立案しなければなりません。パスワードに振り回されないためには、哲学が重要です。日本のような自由主義国家の研究者は、科学研究と民主主義の類似性を論じたR.ファインマンの哲学に倣いたい。「懐疑の自由が研究には最も重要だ。絶対の真理や知識にあまり固執せず、つねに不確かさの“危険を賭し”ながら進むとき、道が開ける。」ここに面白さがあり、松下幸之助さんなど成功した経営者にも通じる哲学があると思います。

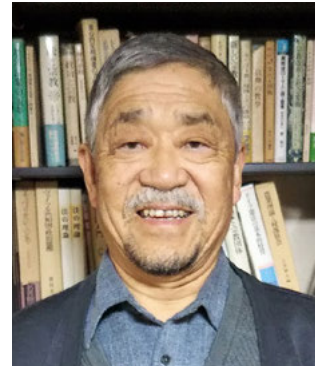
(あさみ とおる, 株式会社国際電気通信基礎技術研究所代表取締役社長,  
昭和49年工学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

## 随想

## 「解散は総理の専権事項」？

名誉教授 初宿 正典



京都大学を2012年3月に退職後に引き続き教育と研究に携わった京都産業大学法科大学院も退職して、まもなく5年になる。その後は、COVID-19の影響も大いであって、学界での活動もかなり疎遠になってしまい、今では多くの自由な時間を自宅で過ごす日々が多い。いきおい、テレビの報道番組を見る機会も増えたが、同時に気になることも多くなった。たとえば、今や市民権を獲得したと言ってもよい、いわゆる「ら抜き」ことばも、私には大変違和感があるが、ここでそれを問題にするつもりはない。

ここで問題にしたいのは、政権の維持が怪しくなるたびに、内閣官房長官とか自民党の重鎮などが、メディアの記者等に「近々、衆議院の解散の可能性は？」などと問われた時に幾度も耳にした「解散は総理（首相）の専権事項ですから」という一言である。閣僚の逃げ口上のようにも聞こえるが、それは措くとして、問題はこの「衆議院の解散は総理の専権事項」なる命題である。

衆議院の解散について、日本国憲法は第7条三号で天皇の国事行為の一つと定めているが、もとより現在の象徴天皇制下での天皇の国事行為は、あくまで「内閣の助言と承認により」行われるのであって、天皇が独自に解散を決定することはできない。解散の実質的な決定権をもつのは内閣であって、総理が解散の専権的決定権を有しているわけではない。

そもそも、総選挙で選ばれた衆議院議員がその4年の任期を全うした後に新たな総選挙が実施されたのは過去に一例のみ、三木武夫内閣の時であるが、この内閣も、実は1972年12月22日の総選挙後に発足した第二次田中角栄内閣が1974年11月に金脈問題で辞任したあと、いわゆる椎名裁定によって三木が自民党総裁に選出されて成立した（12月9日）ものであったから、総選挙後に発足した内閣が議員の任期が満了する4年後まで続いた例は戦後の憲政史上一度もないことになる。このような事態はそれ自体として異例ともいえるが、それはさておき、政権基盤の弱かった上記の三木内閣は、1976年2月のいわゆるロッキード事件の勃発、田中角栄の逮捕などで一気に不安定化していく（三木おろし）。三木は同年9月10日の閣議で、臨時国会を召集して衆議院の解散を断行する意向であったが、福田副総理ら反三木派の多くの閣僚が反対したため、三木は解散を断念せざるをえず、衆議院議員の任期満了を前にした12月5日の総選挙となった。もしも解散が総理の専権事項ならば、閣議で反対する者があっても解散を決定できたはずであるが、そうはできなかった。

もうひとつ別の例は、小泉内閣のいわゆる郵政解散で、2005年8月8日の参議院本会議で郵政民営化法案が否決されたとき、前々からこの法案が否決されたら解散すると明言していた小泉首相は、同日午後の臨時閣議で、解散に反対する意見を述べて最後まで閣議書への署名を拒否した島村宣伸農水大臣を罷免して、自らが農水相を兼務して解散に踏み切った。解散の決定には、やはり全員一致を慣例とする閣議での意思統一が要るのであり、決して総理の専権事項ではないのである。

（しやけ・まさのり 元法学研究科教授 平成24年退職 専門は憲法・国法学）

[目次に戻る ↗](#)

## 洛書

## タイで研究室を主宰する経験

堀毛 悟史



指定国立大学法人としての京都大学の取組みの一つにオンサイトラボラトリーがある。その中で私はタイのヴィタヤシリメティー科学技術大学 (VISTEC=ヴィステック) において、ラボラトリー「スマート材料研究センター」の運営を担当している。

このラボは2018年に設置され、おもに化学や材料分野の研究がミッションである。現在5名の博士課程のタイ人学生の教育と研究指導を進めている。

VISTECは2015年に設立された大学院大学であり、2025年にASEANの大学でトップ10入り、2035年には世界大学ランキングで50位以内を目標に掲げ、邁進している。この目標の実現のため、大学が各々のラボに求めることは明確である。その一つは、Nature Indexに名を連ねる論文にどれだけ研究成果を発表できるのか。私自身はそのような指標を第一に研究を進めてきたわけではないが、郷に入れば郷に従え、と考え、このオンサイトラボではできるだけその目標に貢献できる研究活動も行ってきた。

研究室主宰者が頻繁に訪問、滞在できない過去数年の難しい状況の中、現場の学生はお互い協力しながら一からラボを立ち上げ、今年の10月に初めて、一期生として学生1名を世に送り出すことができた。シリントーン王女の同席のもと行われた卒業式に参加しながら、やってきて良かったなど、この経験に感謝した。

化学や材料の実験研究では、常にメンバーの安全に気を配らなければいけない。また現地は落雷が多く、日本では考えられないほど頻繁に停電が起こるため、実験装置の維持、運用も大変である。様々な問題を通して、オンサイトラボの運営には、現

地の同僚の協力が不可欠であることを改めて実感した。京都大学側の旨みを考えるとうまくいかず、ラボを設置させてもらっている先方の個人個人とWin-Winになるように一つずつ努力することが、結果として良い循環と信頼、そして持続性を生む。バンコクから車で3時間かかるこのラボに滞在し、学生と研究生活を送るたびに、WINDOW構想の一つWILD and WISEにある、「多様な教育研究環境に身をおくことによるタフな学生の育成」を思い出し、これは教員にとっても同じ!と感じるのである。

もう一つのオンサイトラボのミッションは、海外の学生を京都大学に迎え入れることである。ただこれには決まった方法がない。先例や口コミを通して広がる評判に従い、学生は進路を決める。大きな可能性を持つ学生は現地の大学が放っておかない。この数年の間、タイ国の大学



オンサイトラボの第一期生の卒業式にて



## 洛書

間における学生リクルートはますます厳しい競争の中にある。チュラロンコーン大学は多くの部局において、大幅な期間短縮で修士号を得られる体制を立ち上げた。変わりゆく教育環境の中、我々オンサイトラボはタイ国内外の Top Institutes の中で価値を出し続けなければいけない。京都大学の持つ良さや特徴をうまく融合させながら、自走するラボの運営、そして一人でも多くの化学・材料研究者を輩出してゆきたい。

(ほりけ さとし, 高等研究院准教授, 専門は無機化学)

[目次に戻る ↗](#)

## 話題

## 部局等ウェブサイト開発講習会を開催

総務部広報課では、2022年10月25日(火)に、部局等ウェブサイト開発講習会をオンライン方式で開催しました。

あらゆる組織において、ウェブサイトを用いた広報活動はもはや常識であり、本学においても、部局単位はもとより、研究室単位、プロジェクト単位でも独自のウェブサイトを運用することが一般的になりつつあります。

一方、ウェブサイトの開発・運用は、専門的知識を要することもあり、外注する場合でも、委託業者とのやり取り等のハードルが高く、意思疎通が十分でないまま、手探り状態での開発・運用となることが珍しくありません。本講習会は、主に部局や研究室でウェブサイト開発・運用を担当する教職員が、これらの業務をスムーズに遂行できるようになることを開催目的としています。

本講習会は、本学Web戦略室の教職員を講師に迎え、約150名の本学教職員が参加しました。2人の講師により、仕様書の作成手順、適切な開発工程、開発後の運用方法、情報セキュリティ対策等広範囲にわたる解説を行いました。講習内容は、本学の実情に沿った実務的なものであり、2時間半にわたる長丁場の講習会でしたが、講習会終了後のアンケートでは回答者の85%以上から「とても理解できた」「まずまず理解できた」との回答があり、参加者にとって部局等ウェブサイト開発の理解を深めるうえで有益な講習会になりました。

(総務部(広報課))

[目次に戻る](#)

## 宇治キャンパスで2022年度安全衛生講習会を開催

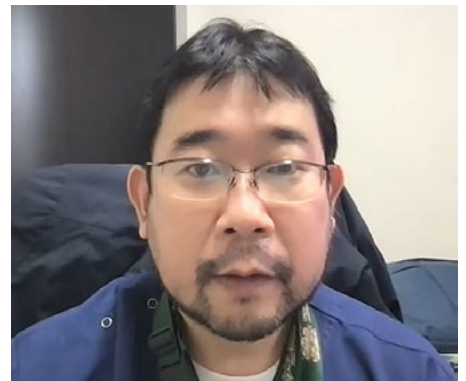
宇治キャンパスでは、宇治事業場衛生委員会と宇治キャンパス環境安全保健センターの共催により、2022年11月17日(木)に宇治事業場安全衛生講習会をオンラインで開催しました。

本講習会は宇治地区の教職員や大学院生等を対象に、「年間安全衛生管理計画」に基づき開催しているもので、今回は忽那賢志 大阪大学大学院医学系研究科感染制御学分野教授を講師に迎え、「ポストコロナ時代の感染対策について」をテーマに講演いただきました。

講演では、過去に人類が経験したパンデミックから現在のCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)までの解説とともに、「感染」が成立するのがどのような状態で、感染予防に何が必要とされるのか等について、基本的な考え方に関する幅広い説明がありました。特に、COVID-19によって広く知られることになった飛沫感染や接触感染については、エビデンスとともに考えられる感染ルートが示され、マスク着用の効果や今後求められる感染症予防防



青山卓史 宇治事業場総括安全衛生管理者



忽那賢志 大阪大学大学院医学系研究科教授



策についての話がありました。

今回の講習会は、COVID-19の世界的流行の収束が見えない中での開催となりましたが、講演後には活発な質疑応答が行われ、今後の感染予防・感染対策に資するものとなりました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

## 訃報

このたび、増田弘昭 名誉教授、高浪 満 名誉教授が逝去されました。  
ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

## 増田 弘昭 名誉教授

増田弘昭先生は、令和4年11月10日逝去されました。享年79。

先生は、昭和41年3月広島大学工学部化学工学科を卒業、同大学大学院工学研究科修士課程化学工学専攻を経て、同47年3月京都大学大学院工学研究科博士課程化学工学専攻を単位取得退学されました。同年4月日本学術振興会奨励研究員となり、同48年1月京都大学工学部助手に採用され、同年5月には京都大学より工学博士の学位を授与されました。その後、同54年4月に広島大学工学部助教授に昇任、同61年4月には同大学工学部教授に昇任されました。平成元年4月に京都大学工学部教授に配置換えとなり、工学部化学工学科機械系単位操作講座を担当されました。その後の大学院重点化に伴い、同5年4月には同大学大学院工学研究科化学工学専攻化学システム工学講座粒子系工学分野を担当されました。その後、同19年3月に定年により退職され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられました。



この間永年にわたって学内においては、学生の教育と研究者の指導にあたり、多くの人材を育成し、平成14年4月から同15年3月まで京都大学工学部工業化学科長を務められました。学外においては、化学工学会英文誌編集委員、化学工学会研究部門委員会委員、化学工学会国際交流委員会委員、粉体工学会編集委員長、粉体工学会会長、日本粉体工業技術協会会長、日本エアロゾル学会理事、静電気学会理事、ISO/TC24（国際標準化機構、技術委員会）国内委員会委員長等を務められ、学術行政に尽力されました。海外においても、多くの国際会議に出席され、組織委員、科学評価委員等を務められ、平成2年9月第2回粉体工学世界会議においては事務局長を務められました。

研究面においては、微粒子工学に関する研究、粉体工学に関する研究、粒子系基礎現象に関する研究、中でも微粒子の特性評価と分散、分級、輸送、計測の開発において優れた研究業績を残され、精密な実験と詳細な理論解析を重ねていく方法論に加えて独創的なモデルの提案により、基盤技術と応用技術の発展に寄与されました。先生は、微粒子工学の新領域への展開において特に静電気工学、化学装置工学および粉体工学の進展と体系化に関し指導的役割を果たされ、微粒子工学を含む化学工学の専門分野において、わが国における斯学の進歩に多大な貢献をされました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

## 訃報

## 高浪 満 名誉教授

高浪満先生は、令和4年9月25日に逝去されました。享年93。

先生は、昭和27年京都大学理学部を卒業、同28年3月同大学理学部助手、同37年5月広島大学原爆放射能医学研究所助教授を経て、同42年3月京都大学化学研究所教授に就任されました。この間、昭和36年12月に理学博士（京都大学）を取得、同38年9月より同41年8月までアメリカ合衆国ブルックヘブン国立研究所ならびにカリフォルニア大学宇宙空間研究所で在外研究をされました。昭和56年4月より平成5年3月まで化学研究所附属核酸情報解析施設長、昭和63年4月より平成2年3月まで化学研究所長を併任され、平成5年3月停年により退官の後、同年4月に京都大学名誉教授の称号を授与されています。



先生は長年にわたり分子生物学の教育・研究に従事される傍ら、関連研究者とともに日本分子生物学会の設立に尽力され、昭和62年4月より平成元年3月まで同学会会長を務められました。また、平成6年4月より同9年8月まで財団法人かずさDNA研究所の初代所長を務められ、DNA Research誌をDNA研究の国際学術誌として世界に先駆け創刊されています。先生の研究は、一貫して核酸の構造解析を基盤として生物の様々な現象の分子機構に迫るものであり、わが国の分子生物学の創成期において先導的役割を果たされました。タンパク質生合成の初期反応の研究、転写開始領域（プロモーター）の構造と機能に関する研究などは特筆すべきものとして挙げられます。また、fdファージの全塩基配列の決定によりゲノム科学の先鞭をつけられるとともに、大腸菌複製開始領域の構造と機能の研究、高発ガン性アデノウイルス12型の発ガン遺伝子の構造決定、土壌細菌 *Bacillus thuringiensis* が合成する昆虫毒素（Bt毒素）遺伝子の構造決定など、多くの重要遺伝子の構造研究に携わり、多大な成果を収められました。さらに、DNA研究関連の技術開発、DNA塩基配列決定法を含む遺伝子組換え実験技術の普及、バイオ産業の育成などを通じて、わが国の生命科学研究分野の発展に多大な貢献をされました。

（化学研究所）

[目次に戻る ↗](#)